

わが心の山 富士を語る その5
遠くから見えた富士

「家から東京タワーが見えるということは、東京タワーから家が見えるはずだよな」と言った人がいる。赤岳から、甲斐駒から、槍から・・・富士山が見えるので、当然その逆もある訳だ。では最も遠くから見えるのはどこだろうか？

「距離的に見えるだろうか？」という点と、「物理的な障害物の関係で見えるだろうか？」という二つの観点があるが、さらに「地球の丸さに隠れてしまうだろう」という点も考えておかなければならない。地球を半径 6350Km の正球体と考えると、任意の海面からおおよそ 200Km 余りの地点の海拔 3776m の突起が見えるような気がする。勿論見えるような形をしているかどうかや、見える視力を持っているかにもよるだろうが。

インターネットに載せられている各種情報を探て見ると、那智勝浦や大台ヶ原の山の名前が登場しているが、いずれも 300Km を越える距離になる。和歌山県や奈良県の山から見えるという話も聞いたことがある。だが、いずれも自分の目で試してみたことはない。

山歩きに出かける時は、「この山からは富士山が見えるだろうな」「この山から富士山が見える筈だ」などと予め頭の中に富士山の心を用意していることが多い。そんな時に思いがけない曇天に遭ってしまうと、大金を紛失したような落胆に陥る。その逆に、手前に大きな山並みが走っていて、「この山からは富士山は見えないだろうな」と思ってでかける山。大きな山並みの中の僅かな峠の切り込みに雪を着けた白いものが見えたりすると、嬌声を発したくなることもある。

社用の外出や出張の時、またお葬式で出かける時など心が他所に行ってしまう時には頭の片隅にも富士山の心がないことが多い。そんな時に偶然見えた富士は予想外の感激になることが多い。

「こんな遠くからは見える筈がない」とか、「妨げるものがあるので、この場所からは見えないだろう」などと思っていたり、そんな時に見えた富士は驚きも加わり、素晴らしい記憶になる。

< 1 > 木曾山脈からの富士

中央アルプスの主稜線縦走を何年か続けたことがある。北アルプス・乗鞍・御嶽山・白山・南アルプスなどなど見ごたえのある景色がたまらず、その殆どはたっぷりと残雪がある 5 月の連休だった。

東京方面からの旅だと交通機関の便利さの関係で東側の天竜川の谷から入ることが殆どだった。天竜川の谷を挟んでどっかりと南アルプスの稜線が居座り、振り返りながらその眺めを楽しむことが中央アルプスの山歩きの初日の楽しみのひとつになる。甲斐駒・仙丈・白根三山・塩見・荒川・赤石・聖・・・・、3000m



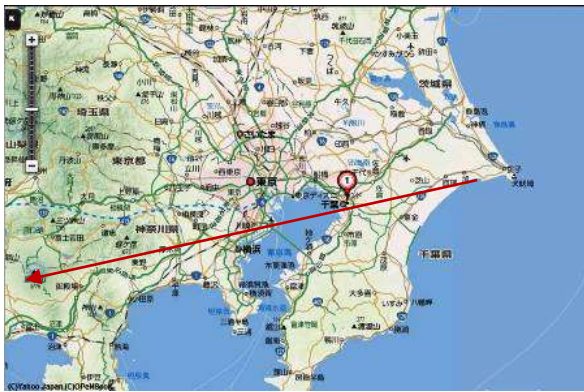
前後の巨大な赤石山脈が壁のように立ちはだかる。海拔 2800m の稜線まで登りつめて壁画を楽しんでいる時、

南アルプスの細かな突起にはあるまじき小さなトンガリを発見。よくよく凝視して見れば、2900mの稜線の僅かな窪みから頭だけ出している富士山だった。思いがけなく発見した富士に「ちょっと得した気分」を味わうことができた。

< 2 > 九十九里浜の北端からの富士

職場の慰安旅行で九十九里の北部にある飯岡の国民宿舎に泊ったことがある。九十九里浜ももう 2Km ほどで終わってしまうような所で、むしろ犬吠埼の方が近いような場所だった。宿の南側は太平洋に面した漁港で、この向こうにあるのはハワイなのか・・・と冗談を言い合った記憶がある。

宿のロビーに飾ってある写真の中に「富士山が見える宿」というような説明が付いた一枚の写真があった。夕暮れの空に、地面に這いつくばるような房総の低山のかすかな窪み、そしてその中央部に小さな突起。この一枚の写真が気になって、冬のある日の夕暮れ時にあらためて確認に行ってみた。確かに見えた。

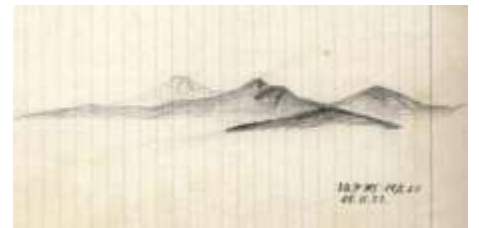


房総半島で一番高い山は海拔 400m 余しかないし、それも南房総にある。半島の北部は低いなだらかな丘陵地帯で、遠方から眺めて見れば地平線にかすかな起伏がある位にしかならない。南の山並みが北に走って来て小さな起伏に変わる所で、その小さな起伏の窪みに富士のトンガリが確認できた。ここからは距離にして 150Km 位になるだろうか。オレンジ色の冬の夕暮れにきれいなシルエットだった。

< 3 > 関東平野からの富士その 1

外出する時には一冊のノートを持ち歩くことが多かった。手帳では小さすぎる、普通のノートでは大きすぎる。気が付いたことをメモしたり、思い付いた短文を書き記したりに使うので、やや小さめなノートを選ぶことが多かった。

ある日、古い小ノートをパラパラとめくっていたら、赤い表紙のやや縦長の小さなノートに富士山のスケッチがあるのを発見した。鉛筆書きで簡単な走り書きの富士山で、「坂戸町付近より 45.11.21.」と書いてあった。おそらく、東上線の坂戸町駅付近を走る電車の車内からのスケッチと思われる。奥多摩の大岳山と思われる秀麗な山容が富士の横に並んでいる。そしてその右に見えるのは西谷山か雲取山方面だろうか、その他の山があまり描かれていない所を見ると、走る車内から目に止まったものだけを走り書きしたように思える。夕暮れに真っ白になり始めたばかりの 11 月末の富士が美しかったのに違いない。関東平野の夕暮れ時には、意外なほどにきれいな富士を見ることができる。



< 4 > 関東平野からの富士その 2

北関東方面への出張の時は一杯飲んで最終のりょうもう号で帰ることが多かった。ある冬の日、太田からの帰りは事情があって飲まずに夕方になった。

太田を出たりょうもう号は遙か南東の浅草へ向かう電車なのだが、浅草とは全く異なる方角の北東に向かう。渡良瀬川に最も接近したところにある足利市駅を過ぎると、ようやく大きく南南東に向きを変えて館林に向かう。館林を出ると広大な関東平野を実感するような景観の中を南に進み、羽生で再び南東に向かうようになる。東武伊勢崎線は頻繁に方向を変えて走るので車窓の景色にも変化があって面白い。

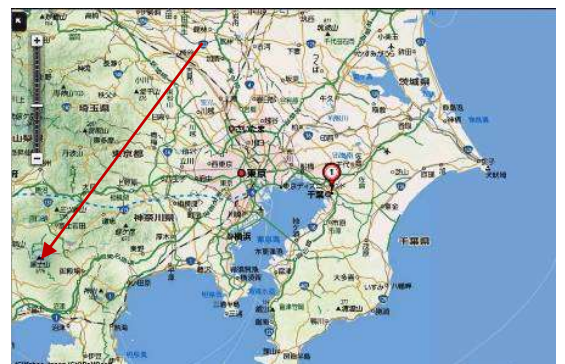
手帳にメモをしながら缶ビールを飲んでいる内に太陽は沈み始め、オレンジ色の空に奥多摩・奥武蔵の山並みが影絵を見せ始めるようになった。そして、その影絵の中に参加する富士の秀麗なフォルムは素晴らしい影絵の主役に躍り出るようになった。

< 5 > 関東平野からの富士その 3

高崎発 15 時 06 分、両毛線小山行。両毛線は新前橋までは上越線を走る。

新前橋から伊勢崎までは南東に走り、次に桐生まで北東に走る。その後富田まで南東に走り、岩舟から栃木までは北東へ、そして最後に南東に走って小山駅に入る。東武伊勢崎線以上に面白い走り方をする路線だ。出発前に地図上でこの鋸歯状の路線を確認し、景観の変化を想像して楽しみにしていた。

前橋まで来ると車窓左手に赤城山が大きく広がってきた。山頂は霧氷で白く化粧している。そして右手後方に平頂の荒船山と凸凹の妙義山が去って行くのが見える。国定あたりではキャベツと白菜が整列する大



きな畑の向こうに関東平野の広がり。方向を変える度に景観の変化を楽しませてくれて飽きることがない。桐生・足利、関東平野の北壁になる北部の山々の冬らしい色が気持ち良い。足利を過ぎると太陽は沈み始め、遠くに富士を伴にした影絵のような山波がオレンジ色の協奏曲を奏でるようになる。岩舟まで来ると進行方向に筑波山も姿を現し、車窓からの富士見にさらなる一味を加えてくれた。



以上